目　次

ワラと生活……1
Ⅰ．生活の中のワラ……11
　1．衣生活……12
　2．食生活……16
　3．住生活……18
　4．農　耕……20
　5．山仕事……21
　6．狩猟・漁撈……23
　7．養　蚕……24
　8．畜　産……27
　9．運　搬……30
　10．信仰・行事……33
　11．人の一生……41
Ⅱ．手仕事と用具……44
　1．手仕事の技……45
　2．手仕事の用具……47
Ⅲ．はきものにみるワラ民具の地域性……49
　1．平坦部のはきもの……50
　2．飯山以北のはきもの……52
　3．戸隠のはきもの……56
　4．西山部のはきもの……59
出品目録……65

凡　例

1．本書は第7回企画展「ワラと生活」の解説用として作成した。
2．資料番号の前の◎印は国指定重要有形民俗文化財を示す。
3．本文に掲載した氏名は敬称を省略させていただいた。
4．法量は基本として長さ×幅×高さについて表記した。
5．図版番号と陳列番号は共通するが，陳列は必ずしも番号順にはなっていない。
6．紙面の都合で，陳列資料のうち割愛したものもある。
7．期間中，都合により陳列資料を変更することがある。

第７回企画展

「ワラと生活」開催にあたって

長野市立博物館は，昭和56年秋開館以来23万人余の来館者を迎え，館開設当初の目的である，市民とともに新しい文化を創造していく努力を重ねて来たところです。常設展示は，現在までの長野市を中心とするこの盆地に根ざした文化を概観し，先人の遺産を将来への文化創造の糧として生かしていただくため，大きな流れを学習していただくようになっております。もとより限られた場での展示のため，日進月歩の研究の成果を万遍なくお見せすることはできませんが，それを補う意味で開催しているのが，企画展として年３～４回催している展覧会です。

当館学芸員室の研究部門は，大きく自然科学・人文科学に分かれ，そのうち人文科学部門は歴史学民俗学の専門分野で研究を進めています。民俗学が解明してくれる生活習慣・風俗の資料は，長野盆地を中心とするこの地域には比較的多く残され，きびしい自然の営みの中で生活をして来た先人の努力の跡がつぶさに追求できます。

今回の主題のワラは，弥生文化定着以来約2300年の間，日本人の生活に密着し，独特の生活文化を生んで来ました。中でも，冬期間雪に閉じ込められる地域では，この間の仕事としてワラ製品の生産が進み，農業の一端として育って来ました。本来自然を相手として営んで来た農業だけに，気候や地形などと深いかかわりがあり，そこで使われる農具やその補助具にも強い地域性が認められるのは，当然とも言えます。

一里一尺とも言われる豪雪地から，比較的雪の少ない平坦地までの各地域で生産されたワラ製の民具は，農作業補助具としてはもちろん，日常生活の細かな部分まで工夫して使われて来ました。それは，人の誕生から終焉までのあらゆる場面で使われたと言ってもいいほど衣・食・住にかかわって来ました。

「ワラと生活」展では，ワラ製品の自然とのかかわりの深さを追求するとともに，農業の姿が変化していく中で，使われなくなり，作られなくなって来た製品の保存と，その技法の記録に力を入れました。

御協力いただいた技術伝承の各位は，すでに生業としては成り立たなくなっているワラ仕事を思い出され，多くの作品を製作されました。単に懐古の情にひたるのみならず，もう一度自然と人とのかかわりを追求する意味で，ワラ製品の意義をかみしめたく思うものです。

昭和59年２月19日

長野市立博物館

館長　掛　川　一　夫